

KIRIN



よろこびが
つなぐ世界へ

Joy brings us together

生物多様性主流化フォーラム in 中部
OECMを通じた企業の生物多様性保全活動



希少生物が生息・生育するシャトー・メルシャンの梔子ヴィンヤード

2023年1月25日
麒麟ホールディングス株式会社
CSV戦略部 小此木 陽子

機密性区分	重要 (B)
開示範囲	関係者限り
保存期限	2024年12月31日
複製可否	可

本日本話する内容

- ▶ 弊社が事業を通じてどのように生物多様性保全に貢献しているのか。
- ▶ ビジネスを通じて自然資本の持続的利用は可能なのか。

本日本の内容

- ① キリングループとは
 - グループ概要と自然資本への取り組み
- ② 梔子ヴィンヤードの取組みを通じた30by30への貢献
- ③ まとめ

グループ概要と「生への畏敬」

- キリングループのビジネスは農産物と水が主原料であり、生物・水資源に大きく依拠している
- 醸造哲学である「生への畏敬」はキリングループならではのCSV経営の拠り所であり、環境経営の基盤

事業領域



商号： キリンホールディングス株式会社
 設立： 1907年（明治40年）
 資本金： 102,045,793,357円
 従業員数： 29,515人（連結）

連結売上収益： 1兆8,216億円
 連結事業利益： 1,645億円

「生への畏敬」



CSVパーパスと日本ワインビジネス



- ▶ メルシャンは、農業と地域社会の存続、そして良質なワイン用ブドウの確保を目的に、2003年から長野県で荒廃した桑畑のブドウ畑への転換を開始

キリンのCSVパーパス



シャトー・メルシャンはワールドベストヴィンヤードを受賞



シャトー・メルシャン 梔子ヴィンヤードの変化

- ▶ メルシャンは、農業と地域社会の存続、そして良質なワイン用ブドウの確保を目的に、2003年から長野県で荒廃した桑畑をブドウ畑へと転換

以前



現在



梔子ヴィンヤード生態系調査の背景



▶ 遊休荒廃地を梔子ヴィンヤードに転換する生態系への影響を、2014年から農研機構との共同研究で調査を開始



日本ワイン拡大

- 3.7万箱（2016年）⇒6.7万箱（2027年）
- 遊休荒廃地をブドウ畑へ転換

社会的課題

- 遊休荒廃地の活用
- 地域の活性化

遊休荒廃地を日本ワインのためのブドウ畑に転換していくことは、生態系に悪影響を与えないのか？

- 農研機構の調査の結果、梔子ヴィンヤードが希少種を含む多様な生態系を持つことが判明
- 草生栽培と適切な下草管理を行っている垣根栽培のブドウ畑が、**広大で良質な草原を構成**

生態系調査で見つかった希少種を含む多様な生きもの



- ▶ 梔子ヴィンヤード（長野県）で多数の希少種（植物・昆虫）を発見
- ▶ 垣根栽培・草生栽培のブドウ畑が、生物多様性にポジティブインパクトを与えている



ベニモンマダラ：環境省ならびに長野県レッドリストの準絶滅危惧種



クララ：環境省レッドリストの絶滅危惧ⅠA類（長野県の絶滅危惧ⅠB類）であるオオルリシジミの唯一の食草。



ウラギンスジヒョウモン：環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類。長野県レッドリストの準絶滅危惧種



ユウスゲ：長野県レッドリストの準絶滅危惧種



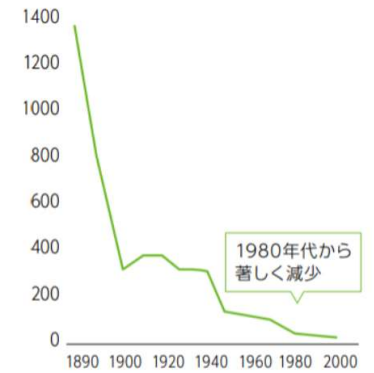
メハジキ：長野県レッドリストの準絶滅危惧種



スズサイコ：環境省ならびに長野県レッドリストの準絶滅危惧種



日本の草原面積の推移



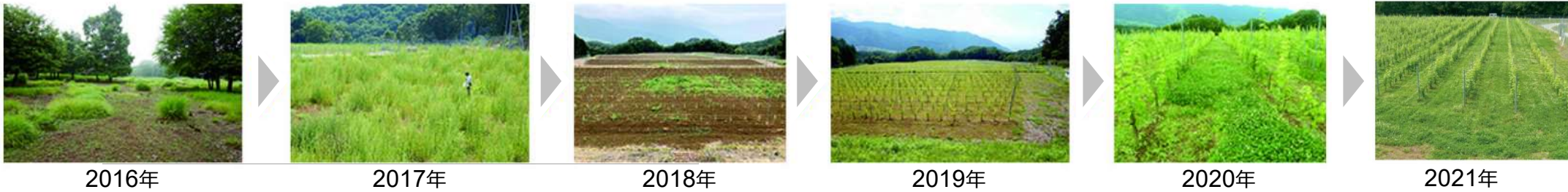
林野面積年統計、農林省統計表、農林水産省統計表より集計

天狗沢ヴィンヤードでの生態系回復調査

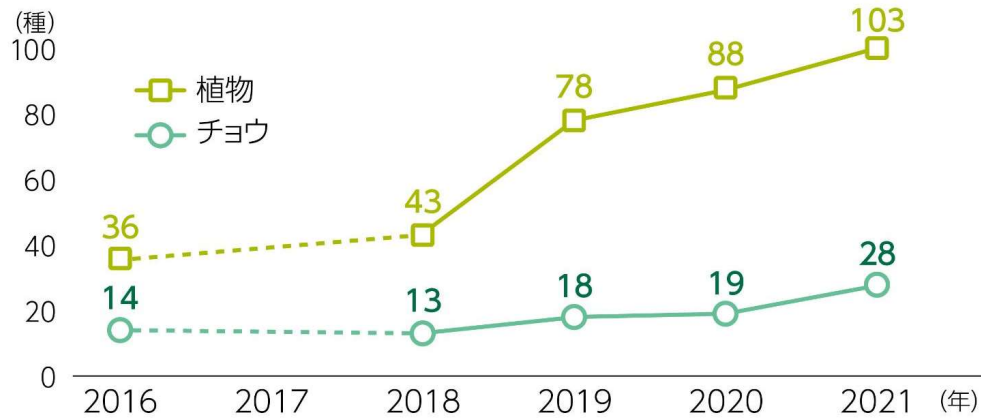


▶ 天狗沢では、遊休荒廃地の状況から調査を開始し、ブドウ畑に転換している過程を調査する世界でも珍しい研究を実施中

天狗沢ヴィンヤードの転換過程



天狗沢ヴィンヤード生態系回復推移



ウラギンズジヒョウモン
環境省レッドデータブック絶滅危惧種Ⅱ類

※2017年は生態系調査なし、植物の調査は2018年からとなります。

従業員参加による希少種・在来種の再生活動

▶ 2016年からは、専門家の指導のもと、従業員参加による希少種・在来種の植生再生活動を開始し、良質な草原に変化



NGO・麓の小学校によるクララを増やす活動



▶ 希少種のオオルリシジミの幼虫の唯一の食草クララを増やす活動を、NGOとボランティアとで実施して成功、本年からは地元小学校が参加

NGO+ボランティア

— 麓の小学校 —

クララ再生活動



2019年に挿し穂取り（左上）を行い、農研機構で苗に養成した後、ボランティアが約2年間育て、2021年5月末に梔子ヴィンヤードに植樹



オオルリシジミ：環境省のレッドデータブックで絶滅危惧種IA類
(写真は、農研機構が阿蘇で撮影したもの)

LEAPによる「場所」と「依存性」に着目した試行開示

- ▶ 対象としたのは、従来から取り組みのある「スリランカの紅茶農園」「日本のヴィンヤード」「豪州の水資源」
- ▶ 何れも「場所に固有」の課題であり、「事業の依存性が高い」という特徴がある課題

マネジメントサマリー：自然資本（生物資源・水資源）

https://www.kirinholdings.com/jp/investors/library/env_report/

自然資本と“場所”の認識

気候変動と自然資本の統合的理解と開示

2021年5月に、Finance for Biodiversity (F4B)イニシアチブが発表した「The Climate-Nature Nexus: Implications for the Financial Sector」では、気候変動と自然資本を別々に捉えるのではなく、統合的に考慮する「The Climate-Nature Nexus」の考え方が強調されています。キリングループの事業は自然資本に依存する事業であり、TCFD提言に基づくシナリオ分析を行う中でも、気候変動が原料農産物や水に大きな影響を与えることを理解してきました。環境課題が独立したものではなく相互に関連していることを前提に、統合的 (holistic) に解決するのがキリングのアプローチであり、「The Climate Nature Nexus」の主張は、私たちが目指してきたことそのものと言えます。今後は、TCFDとTNFDのフレームワークを使いながら、統合的な開示を進めていきたいと考えています。

“グローバル”と“ローカル”の視点

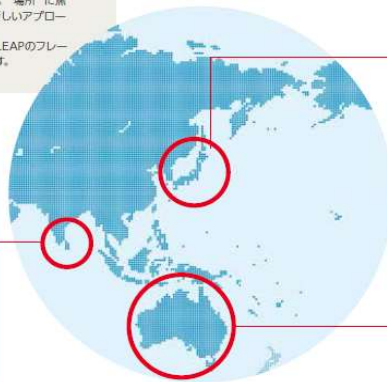
キリングループは、2010年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議を契機として、生物資源のリスク調査を行い、事業が特定地域の自然資本に依存していることを理解しました。「キリン 午後の紅茶」の主要原料生産地であるスリランカでレインフォレスト・アライアンス認証の取得支援などを開始したのは、この課題を解決するためです。水資源では、比較的水の豊かな日本と水ストレスの非常に大きなオーストラリアで事業を行ってきたことから、水ストレス・水リスクが国や地域によって異なることを早くから認識して取り組みを進めてきました。TCFDのシナリオ分析では、気候変動が特定の地域の自然資本に極端な物理的影響を与えることも確認できました。このような経験から、キリングループは、地球温暖化はグローバルな課題であり全ての企業がGHG排出量削減が必要なこと、生物資源や水資源などの自然資本では“地域”や“場所”によってその特性が異なるためにローカルな視点が必要であることの方を理解し、TNFD開示フレームワークβ版で示されたLEAP (Locate, Evaluate, Assess, Prepare) アプローチなどを参考に、統合的に取り組みを進めています。

“場所”に着目したLEAPアプローチ

LEAPアプローチでは、自然との接点を見出す (Locate)、依存関係と影響を診断する (Evaluate)、リスクと機会を評価する (Assess)、自然関連リスクと機会に対応する準備を行い投資家に報告する (Prepare) の順で分析アクティビティを行います。“場所”に焦点をあてて自然資本への依存や影響を評価し、優先順位をつけて取り組む新しいアプローチです。キリングループでは、自然資本に依存する企業として進めてきた取り組みをLEAPのフレームワークで整理し、深化させ、適切な開示につなげていきたいと考えています。

事業への影響が大きく、かつ自然や社会環境上も重要な“場所”～スリランカの紅茶農園～

- Locate** 「キリン 午後の紅茶」のおいしさを支えるのはスリランカの紅茶農園。農園内に沿岸大都市の水源地が存在
- Evaluate** 日本が輸入するスリランカ産茶葉の約25%を「キリン 午後の紅茶」が使用。茶葉生産地は気候変動により水リスク・水ストレスが増大し、豪雨で肥沃な土壌も流出
- Assess** 依存度が高いスリランカ産茶葉が持続可能に使えない場合は商品コンセプトが成立しなくなる
- Prepare** 2013年からスリランカの紅茶農園に対してレインフォレスト・アライアンス認証取得支援を実施。認証取得農園数・トレーニング農園数は環境報告書・Webで広く公開



“場所”が商品の特徴を決める日本ワイン～梶子ヴィンヤード～

- Locate** ワインの味を決める重要な要素は「テロワール」であり土地の個性。畑は自然が残っており希少種が生息する地域。日本ワイン拡大のためにはブドウ畑の拡大が必要であり、対象は遊休農地
- Evaluate** 遊休農地をブドウ畑にすることで良質な草原が創出され、豊かな生態系に貢献することを農研機構との共同研究で解明
- Prepare** ネイチャー・ポジティブ、30by30に貢献する。共同研究成果は論文・環境報告書・Webで広く公開

水リスクが高く、水資源管理が特に重要な“場所”～オーストラリアの工場流域～

- Locate** オーストラリアのビール事業の醸造所は、全て水ストレスの高い流域に位置している
- Evaluate** 経験的にもAquaductなどのツールでも、オーストラリアの水ストレスは非常に高く、数十年に一度、集中豪雨で洪水が発生すると被害が大きい
- Assess** 節水技術はグループ最優先レベルだが、漏水が深刻化した場合に製造に支障が出る可能性がある
- Prepare** SBTs for Natureのメソッド開発に貢献し、これに沿った新たな目標の設定を目指す。実績は環境報告書・Webで広く公開

スリランカ紅茶農園

原料農産物への非常に高い依存性の事例

国内ヴィンヤード
 遊休農地からの
 ネイチャー・ポジティブ
 の事例

オーストラリア
 水ストレス
 水ストレスのリスク把握・
 課題解決の事例

日本ワインのためのブドウ畑での試行開示（自然資本＝テロワール）

- ▶ 日本ワインのためのヴィンヤード拡大のターゲットは遊休荒廃地
- ▶ 日本ワインを名乗るには国内産ブドウが必要。「テロワール」は「土地固有」「依存性」を体現している

“場所”が商品の 特徴を決める日本ワイン

～梶子ヴィンヤード～

Locate

ワインの味を決める重要な要素は「テロワール」であり土地の個性。畑は自然が残っており希少種が生息する地域

Evaluate

日本ワイン拡大のためにはブドウ畑の拡大が必要であり、対象は遊休荒廃地

Assess

遊休荒廃地をブドウ畑にすることで良質な草原が創出され、豊かな生態系に貢献することを農研機構との共同研究で解明

Prepare

ネイチャーポジティブ、30by30に貢献する。共同研究成果は論文・環境報告書・Webで広く公開



日本ワイン拡大

- 3.7万箱 (2016年) ⇒ 6.7万箱 (2027年)
- 遊休荒廃地をブドウ畑へ転換

社会的課題

- 遊休荒廃地の活用
- 地域の活性化

遊休荒廃地を日本ワインのためのブドウ畑に転換していくことは、生態系に悪影響を与えないのか？

梔子ヴィンヤードはOECMsの登録を目指す



- 30by30の達成に向けた環境省の自然共生サイト認定制度の実証事業に、梔子ヴィンヤードは唯一事業として使用している畑として参画し、認定相当とされた
- 2023年の正式運用開始後、自然共生サイト認証及びOECMs登録を目指す

自然共生サイトの認定に際し、評価された価値



里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場としての価値

希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場としての価値



生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場としての価値

分布が限定されている、特異な環境へ依存するなど、その生態に特殊性のある種が生息生育している場又は生息生育の可能性が高い場としての価値



※ OECM : Other Effective area based Conservation Measure

まとめ：シャトー・メルシャンのヴィンヤードはネイチャー・ポジティブ

- ▶ 日本ワインのためのブドウ畑を広げ「ネイチャー・ポジティブ」に寄与し、OECMs登録を通じて世界に発信
- ▶ 知見を提供し事業を通じたネイチャー・ポジティブの事例拡大に貢献したい

遊休荒廃地を草生栽培のブドウ畑へ



従業員による希少種・在来種再生活動



ボランティア・小学生によるクララを増やす活動



G7 2030自然協約

2030年までに生物多様性の損失を止めて
 逆転させ、
 「ネイチャー・ポジティブ」にする

TNFD（目的）

世界の資金の流れを変え「ネイチャー・ネガティブ」から「**ネイチャー・ポジティブ**」に変えるため、企業が自然関連リスクを報告し行動するための枠組みを作る

国連生物多様性枠組条約COP15

2030年までに陸と海のそれぞれ30%以上を保護・保全する「30by30」が12月に開催されたCOP15で主要な目標として採択。OECMsの登録を通じて、国際目標への貢献を目指す

※ OECM : Other Effective area based Conservation Measure

椀子ヴィンヤードの取組みを世界に発信



- ▶ 生物多様性保全は、単独での実施は難しく、社会全体として取り組む必要があるとし、COP15でも発信
- ▶ 海外では“人の手によって管理されるから守られる”という概念が理解しづらいが、重要な生態系として伝える

COP15での発表



chateaumercianのインスタで発信



溝内さんのご登壇



磯崎さんの動画が流れる様子



よろこびがつなぐ世界へ

Joy brings us together